

CONTENTS

Opening essay:
A characteristic of Japanese whom Perry watched
[*Hirofumi Yamamoto*] ——— i

Faculty Papers

Cultural Border and Imagined Ban: Cultural Politics of Wae-Saek (倭色)
in South Korea during the 1950s and 1960s [Sungmin Kim] ——— 1

Early Modern Sea "Chiso" Practice and the Seto Inland Sea: Case Example of
Tsuwaji Island In Iyo-no-Kuni (Iyo Province) [Tatsuya Tamai] ——— 23

Refereed Papers

Discussions on the Relationship between Newspaper and Time in the
1960s: Development, Limitation and Potentiality as a Response to the
Spread of Television [Koji Akagi] ——— 39

The Relationships between Law and Architecture in the Information Society
[Satoshi Narihara] ——— 55

Development of remote system for supporting building damage assessment
during large-scale earthquake disaster [Makoto Fujiu] ——— 71

Images as functions of Narrative Discourse: Analysis of "The Birth of a
Nation"(1915) by "Lignes de temps" [Anni Namba] ——— 87

The Emergence of the Trans-participant in Media Convergence Society:
A Case Study on Comic Event Staff in Japan [Rujirat Vinitphol] ——— 103

Field Review

Intelligent Transport Systems : Research and International Collaborations
[Shunsuke Kamijo] ——— 117

情 報 学 研 究
JOURNAL OF INFORMATION STUDIES

学環

思考の環

ペリーが見た日本人の特性 [山本 博文] — i

教員研究論文

「文化的国境」と「想像された禁止」 [金 成致] — 1
——50 - 60年代韓国大衆文化における「倭色」の文化政治——

近世における海上馳走と瀬戸内海 [玉井建也] — 23
——伊予国津和地島を事例として——

査読研究論文

1960年代における新聞と時間の関係をめぐる議論 [赤木孝次] — 39
——テレビへの対応としての発展と限界、そして可能性——

情報社会におけるアーキテクチャの関係についての試論的考察 [成原 慧] — 55
——アーキテクチャを介した間接規制に関する問題と規律の検討を中心に——

大規模地震災害時における建物被害認定の遠隔判定システムの設計 [藤生 慎] — 71

映画の Narrative Discourse の機能に関する考察 [難波阿丹] — 87
——映画研究における Lignes de temps の活用——

メディア融合社会におけるトランス・パーティシパントの台頭 [ルジラット・ —— 103
——日本のコミックイベント・スタッフのケーススタディ—— ヴァイニットボン]

フィールド・レビュー

ITS の研究と国際化 [上條俊介] — 117



思考の環

OPENING ESSAY

ペリーが見た日本人の特性

新渡戸稲造氏が、『武士道』の中で、武士道の特質として強調しているのは、まず武士の名誉心であった。そして武士の名誉心という美点が、昇る朝日が高い峰を朱に染め次第に下の谷を照らしていくように、日本人全体の美德となった、と論じていく。

しかし、名誉心は、十六世紀に日本に来たヨーロッパ人が、武士だけでなく日本の庶民の特徴として驚きを交えて書いている。ヨーロッパでは、身分の高い者は名誉心を持つが、庶民は持たないと考えられていた。それまで見てきたアジアでも同様だったが、日本においては違ったのである。

日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルは、「驚くほど名誉心の強い人びとで、他の何ものよりも名誉を重んじます。」と書いている。これがヨーロッパ人の日本人の第一印象だった。

この見方はその後航するヨーロッパ人に受け継がれていく。イエズス会の日本巡察師として三度来日するヴァリニャーノは、次のように書く（松田毅一・他訳『日本巡察記』平凡社東洋文庫）。

「日本人は、全世界でもっとも面目と名誉を重んずる国民であると思われる。すなわち、彼等は侮蔑的な言辞は言うまでもなく、怒りを含んだ言葉を堪えることはできない。したがって、もっとも下級の職人や農夫と語る時でも我等は礼節を尽くさねばならない。さもなくば、彼等はその無礼な言葉を堪え忍ぶことができ

ず、その職から得られる収入にもかかわらず、その職を放棄するか、さらに不利であっても別の職に就いてしまう。」

名誉を重んじるのは、武士だけでなく、職人や農民も同様だったのである。新渡戸氏が『武士道』を書いたのは、宗教心のない日本人の道德規範となった倫理が武士道であることをヨーロッパ人に紹介するためだった。幼い頃は武士の家庭で育った新渡戸氏だったが、成長した頃にはすでに武士の時代は終わっていた。彼が書いたのは、武士道思想というより、日本人全体の美点だったのではないかと。

こうした見方で『武士道』を読み直すと、思いあたる点が多い。たとえば、次のような文章である。

「日本人の友人を、彼がもっとも深い悲しみにある時に訪問してみよ。彼は、目を真っ赤にし、頬をぬらしながらも、いつもと変わらず笑みを浮かべてあなたを迎えるだろう。あなたは、最初、彼が狂ったと思うかもしれない。しかし、しいて彼に説明を求めたとしたら、「人生憂愁多し」とか「会者常離」とか、「生者必滅」とか「死児の齢を数えるのは愚かだが、女心は愚痴にふける」とか、二、三の断片的な常套句を聞くであろう。」

新渡戸氏は、「克己」の章で、日本人が自らの嘆きを表に出さないことを、感情が乏しいのではなく、むしろ感情が豊かすぎるので、幼い頃からそれを抑制するよう訓練されているからである、と主張している。

ある世代以上の人には思い当たる節があると思うが、多くの日本人は、感情をあらわにすることは慎むべきであると考えている。それは、他人を不快にさせるからである。たまに感情のままに振る舞う人がいると、周囲はその人を困った人だと思う。

こうした特徴も、ヴァリニャーノはすでに指摘している。

「ヨーロッパ人と異なり、彼らは悲嘆や不平、あるいは窮状を語っても、感情に走らない。すなわち、人を訪ねた時に相手に不愉快なことを言うべきではないと心に期しているので、決して自分の苦労や不幸や悲嘆を口にしない。その理由は、彼らはあらゆる苦しみに堪えることができるし、逆境にあっても大いなる勇気を示すことを信条としているので、苦悩を能う限り胸中にしまっておくからである。誰かに逢ったり訪問したりする時、彼らは常に強い勇気と明かな表情を示し、自らの苦労については一言も触れないか、あるいは何も感ぜず、少しも気にかけていないかのような態度で、ただ一言それに触れて、あとは一笑に附してしまうだけである。」

悲嘆や不平に耐え、逆境にあっても何でもないような顔をしてそれを克服してきたのが我々の先祖たちだった。これは、過去長い間、多くの天変地異に見舞われてきた日本人が身につけた習性であったと思う。天災は怒りのもっていきどころがない。悲しみにひたるより、むしろ仕方がないこととしてあきらめる、というのが先人が選んだ方法だった。これは、現実の歴史の中にも見ることができる。

嘉永七年十一月四日（1854年12月23日）

に起こった安政東海地震（嘉永七年は十一月二十七日に安政に改元）は、駿河湾から遠州灘沖を震源とする海底地震で、マグニチュードは八・四、東海地方に甚大な津波の被害を与えた。社会情報研究資料センターの「小野秀雄コレクション」には、この時の被害を書いた「諸国東海道大地震大津波大火次第」という瓦版が所蔵されている。この地震の三十二時間後には、同規模の南海地震が発生し、大坂や土佐を潰滅させた。安政と改元されたのは、ペリー来航に続いて起こった東海から南海におよぶ大震災という度重なる国難のためである。

安政元年十二月九日（1855年1月26日）、日米和親条約の批准書交換のため下田に再来航したアダムズ中佐は、伊豆の下田が津波の被害を受け、「同地の外観には大きい悲しい変化があったこと」を、ペリー提督に報告した（土屋喬雄・玉置肇訳『ペリリ提督日本遠征記』四、岩波文庫）。

「低地に在るあらゆる家屋及び公共建築物は破壊された。高所にある二三の寺院及び私人の建築物だけがそれを免れた。そして僅かに十六軒の建物だけが、曾て下田にあったもののうちで残っているものである。住民達は、この潰滅は土地の直接の震動によって起こされたのではなくて、震動による海の運動によるものであるとアダムズ中佐に語った。日本人の語るところによると、同湾及び海岸付近の水は最初猛烈に震動してゐるように見えた。間もなく急速に退き初めて、同港の水底が見えた。そこは普通五尋（約九メートル）の水があった所であった。それから水は普通の高さよりも五尋も高くなって陸の上に押し寄せ、町にも溢れて家々の屋根

まで達し、あらゆるものを流し去った。驚いた住民達は丘陵に逃げ走ったが、頂に達するまでには登って来る水に追いつかれて数百人が溺死した。水がこのやうに退いては返へすこと五六度、あらゆるものを破壊し去り、付近の海岸には打ち倒された家屋や錨地からひきもがれた船舶の破片や残骸が散乱した。」

三月十一日の東日本大震災を彷彿させるような記述である。下田はまったく姿を変え、ちょうど下田に停泊していたロシアのフリゲート艦ディアナ号は大破し、宮島村（現、富士市）沖で沈没していた。

日本の海岸では、古代以来、こうした津波にしばしば襲われ、その都度、甚大な被害を出したのである。

しかし筆者が目撃したいのは、この地震の悲惨な被害ではない。こうした被害を受けた下田の人々の次のような様子である。

「地震によって生じた災禍にも拘はらず、日本人の特性たる反発力が表はれてゐた。その特性はよく彼らの精力を証するものであった。彼らは落胆せず、不幸に泣かず、男らしく仕事にとりかかり、意気阻喪することも殆どないやうであった。バウアタン号の到着した時、彼らは忙しく取り片付けと再建に従事してゐた。毎日あらゆる地方から石材、木材、屋根葺草、瓦、石灰等々が到着して、バウアタン号が出発する迄には約三百軒の新しい家屋が殆ど又は全く出来上がってゐた。但し同艦の滞在中は時々かなり強い震動があって、災禍が再び生ずるかも知れぬと警戒されてゐた。」

地震後、まだ一ヶ月ほどしかたっておらず、強い余震が続いている中で、人々は復興に向け

て働いていたのである。

アダムズ中佐は、「彼らは落胆せず、不幸に泣かず」と報告している。ほとんどの家屋が津波に破壊され、多くの人命が失われた大災害だから、落胆しなかったわけでも不幸に泣かなかったわけではないだろう。しかし、それを表に表さないのが日本人である。おそらく下田の人々は、復興へ向けた仕事をしながら、アダムズ中佐に対して、笑みさえ浮かべながら津波の怖さを語ったに違いない。その姿に、ペリーは、「日本人の特性たる反発力が表はれてゐた」と最大級の賛辞を与えているのである。

この特性は、今回の東日本大震災での被災者の方々の姿にも表れている。あれだけの被害を受けながら、人々は秩序正しく行動し、復興への努力を始めている。東京電力が、福島第一原発が津波に冠水した場合の備えさえしていれば、復興はもっと進んでいただろう。今回の津波は過去最大級のものだったが、決して「未曾有」のものではない。安易なコスト意識で備えを怠った東京電力の歴代経営陣の責任は重い。

下田の話に戻ると、下田の人々は、自らの復興に取り組むとともに、船が大破して国に帰れなくなったロシア人のために、ロシア人船員の指導を受けながら日本人大工が帆船「ヘダ号」を建造している。東大の寮がある戸田に、ロシア人が感謝の意を表して建てた碑があることを知っている学生もいるだろう。当時の人々は、自らの復興だけではなく、たまたま日本に来航して不幸にあった外国人に対しても暖かい厚意を示したのである。

名誉心、あるいは自分の感情を抑制する克己心、同じ不幸にあった人に対する厚意などは、

武士だけの美点ではなかった。長い歴史の間に日本人が身につけた共通の美点である。近代になって欧米諸国の発想法の洗礼を受け、日本人の性質もある部分では大きな変化があった。し

かし、筆者は、東日本大震災の被災者の方々の姿を見ながら、我々は今なおかつて持っていた日本人の美点に期待していいという思いを強くしている。



山本 博文 (やまもと ひろふみ)

1957年2月13日生まれ

[専攻領域] 日本近世史・歴史情報論

[著書・論文]

『江戸に見る日本のかたち』(NHKブックス、2009年)『現代語訳・武士道』(ちくま新書、2010年)『武士の評判記』(新人物往来社、2011年)など

[所属] 東京大学大学院情報学環・史料編纂所・教授、社会情報研究資料センター長

[所属学会] 史学会、歴史学研究会、日本文藝家協会、日本エッセイストクラブなど